

曲目解説

三つのドイツ舞曲

モーツァルト

モーツァルトは、たいへんなダンス好きでありました。冬の寒い日、燃料のない時には、寒さに耐えかねて、部屋で一晩中妻と踊り明かしたという、ユーモラスな、又もの哀しいエピソードも残っています。そして当時のウィーンの人々のダンスへの熱狂ぶりは、とても今日からは信じられないほどだったようです。

ところでドイツ舞曲というのは、古くからドイツに伝わる民族舞曲であるレントラーのテンポを速めたもので、後にウィンナ・ワルツへと発展していきました。今晚演奏しますK. 605のドイツ舞曲は、モーツァルト最後の年1791年2月12日に作曲されたものです。この第3曲は「そり滑り」と呼ばれ、トリオでは郵便ラッパとそりの鈴が聞こえます。

アダージョとフーガ

モーツァルト

モーツァルトは1782年頃、ゴットフリート・ヴァン・シュヴィーテン男爵から、バッハやヘンデルの作品を数えられ、対位法的作品に強い興味を抱きました。一方この頃モーツァルトの妻となったコンスタンツェは対位法的作品が好きだったようで、夫にフーガを書かせたりしました。その中に「2台のピアノのためのフーガ（1783年作曲）」がありました。モーツァルトは後にこれを弦楽四重奏（あるいは弦楽合奏）のために編曲し、その前にアダージョの部分を書き足しました。これが今晚演奏する「アダージョとフーガ K. 546」で、1788年6月に完成しました。

セレナード

R・シュトラウス

この管楽合奏のためのセレナードは、作曲者18歳の時に書かれたものです。1881年に作曲されたこの曲には、メンデルスゾーンやブラームスの影響も見受けられますが、冒頭の第一主題に顕著であるようにシュトラウスの個性的な旋律がいくつも見られ、そこはかたない官能的な雰囲気とともに、作曲者独自の世界がすでに確立されつつあると言っても過言ではないでしょう。この作品は、シュトラウスの才能に対する一般の注目を集めた最初のものであり、1882年11月27日に初演されました。アンダンテ、一楽章形式をとります。

交響曲第1番〈春〉

シューマン

この曲は、1841年1月23日から26日の間にスケッチされ、2月20日までに全体が完成されました。シューマンの生涯で最も幸福な時期にあたっていた上、新しい年を迎えて希望に燃えていたので、そうした気分にあふさわしい交響曲がここに誕生したとも言えるでしょう。初演は、1841年3月31日、ゲヴァンハウスでのクララ・シューマンの演奏会で、メンデルスゾーンの指揮によりおこなわれた。そのときには、クララは、シューマンのピアノ曲とショパンの短調ピアノ協奏曲をとりあげています。この会は、シューマン夫妻にとって大きな満足感を与えたほど成功でした。シューマンは、この交響曲について「これが演奏されたのを聞いた喜びはなんと大きかったことだろう。そして他の人たちも大変に喜んでいて。というのも、この曲は、ベートーヴェン以後のいかなる交響曲にも許されなかったと思えるほどの大きな共感を受けたからである」と記しています。又、この曲は、アドルフ・ベトガーという詩人の詩に靈感を受けて書かれたものとも言われ、はじめは〈春の交響曲〉という名があたり、各楽章に〈春のはじめ〉〈たそがれ〉〈楽しい遊び〉〈春のたけなわ〉という標題もつけられていました。なお、この曲は、ザクセン国王フリードリヒ・アウグスト2世に献呈されました。